

外でとつた寫眞を立體鏡によつて眺める時には、缺點のある部分は學び上つて見える。寫眞は焦點内外で焦點より等距離の點で見る必要がある。

干渉計 Interferometer による方法

世界大戦中英ヒルガー會社の Twyman 氏によつて案出された干渉計による光學レンズの検査法は最近の方法である。此れによる方法の應用の一つとして Ap.J. 誌 1918 年にマイケルソン氏が干渉計による球面鏡の修正方法を述べて居る。ヒルガー會社は製造權は勿論、使用權に對しても特許を有し、他者に無斷で使用さえ許さないし、一器數萬圓に値する器具でもあり、素人の使用し得るものではないが、將來拋物線の修正して應用するべき一つの方法として注目に値する。

故村岡博士のこころ

讀者諸君は、既に、前月の天界誌上で、「送別の和歌」(292頁)二首を讀まれた事と思ふが、その時、一體村岡さいふ御仁は如何なるお方で、誰の爲めに、何うしてこんな歌を詠まれたのだらうかと、思はれなかつただらうか？ あの三十一文字二首こそは、吾が物理學界の大先輩で京都帝國大學の名譽教授であられた村岡範爲馳博士が、その教へ子である山本教授の夫人と共にスマトラへ日蝕遠征に旅立たれるに際して、ものされたものであつて、真情溢るゝを見るのである。が痛ましくも悲しい事に、此の老大家は、その教へ子の歸り來るのも待たれずに、遂に三重縣津の海岸の隠れ家で七十七歳を期して去る四月二十日永眠されてしまつたのである。スマトラ遠征中の山本教授は此の訃を何ぞ聞かれたであらう！編輯同人はその訃を知るや、物理學界の大先輩の爲めに、些か哀悼の微意を五月の天界誌上に表はしたかつたのであつたが、時既に第三稿を終つてをつた時であつたので、遺憾乍らその意を果し得なかつた。既に讀者諸君は當時の新聞紙上で博士の業績を知られた事と思ふのであるが、更に當時の記事を掲げて博士の面目を偲ぶよすががこしよう。

「X 光線の紹介者であり力學、光學、音響學の育ての親ともいふべき博士は、明治 11 年ドイツに留學、ストラスブルグで中等程度の學校から大學まで卒業し、専ら哲學を研究しドクトル・フィロソフィエーの學位を授けられて歸朝一高教授となり、後明治 31 年さらにドイツに留學、今度は物理學、殊に光學と音響學を専攻し、歸朝後、魔鏡の研究と題する論文を提出して、理學博士の學位を得られた。當時論文を提出して學位を授けられた例は甚だ珍しかつた。魔鏡は表面から見て裏面の紋様があらはれる鏡で、博士はその理論を明かにしたもので、博士の研究は外國の物理學書にも引用されてゐる。さらに音響學の方面では古今東西の樂器の性質を明かにし、自ら琴やピアノをひき、ドイツの歌やわが國の雅樂を口ずさみつゝ講義したもので、東京音樂學校長にもなり、大に音樂界の爲めに盡した。雅樂など時々自宅で會を催して、獎勵と研究につくした外、器樂、聲樂ともに、自らよく實物教授をやり、同時に雅樂の話をしたり、なごした。所で、京大に於ける講義は、諧謔交りでなかなか人氣を集めたが、博士はいつも黑板にくつついて背中ばかりを見せて居つたので、口の悪い學生はアダ名して「蟬先生」と呼んだといふ事である。性格は温良そのもので、徳望従つて高く、春風颯蕩常に微笑をたゞへて、未だ嘗て怒つた事もなく情愛の深い人であつた。昔から病身で鶴の様に細かつたが京大引退後は、故郷の鳥取を見すてゝ、暖い伊勢の海邊に移り住んだので七十七歳迄生きられた程である。博士は又非常に趣味の深い人で狂歌俳句をよくし、外遊感想の如きは十七文字の世界漫遊記だつた、又八坂北野平野の社の兼詠に博士のものした和歌を見ないといふ事がなく、歌の雜誌田鶴園にも引き續き歌を寄せ、數萬種の詠草があるといふ。京大に物理科が置かれるにつき三高から轉じて教授となり、定年制のない頃、自ら六十歳で引退したのが明治四十四年といふ古いこころである。」